

## 令和4年度 自己評価計画 (最終評価報告)

	重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	評価基準	後期評価	課題と評価
1	ICT機器を活用できる専門性向上と情報発信	① GIGAスクール構想の考え方を全職員が理解するための研修を行う。	全学部 GIGAスクール構想推進委員会	【成果指標】 研修等を踏まえ、ICT機器の新たな活用法を身につけ、個々の障害特性に応じた使い方を工夫した授業ができた。	ICT機器の活用法を増やし、個々の児童生徒の障害特性に応じた使い方を工夫した授業に取り組むことができた。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	A+B 90.1%	集計結果として、Aは32.1%、Bは58.0%、Cは6.1%、Dが3.8%であった。A+Bが90.1%で達成度判断基準を上回った。GIGAスクール構想校内研修推進委員会による地道な校内研修や、実践シートの作成と学部を超えた共有が功を奏し、徐々にではあるが、個々の生徒の障害特性に応じた使い方の工夫というところに意識を向けることができつつある。C、D評価はなお9.9%みられるものの、A評価で5.4%も上昇したことは大きな成果であった。来年度もICTを活用するための教員の資質・能力をより高めるために、目的を明確にした効果的活用に取り組んでいきたい。
		② 日々の学校生活に係る適切な情報発信を行う。	全学部	【満足度指標】 保護者は、本校が授業の様子をはじめとする、学校生活に係る情報発信を適切に行っていると受け止めている。	来校の機会や、HP、家庭通信、学年だより、連絡帳等で提供された情報をおとして、児童生徒の授業の様子や学校生活への理解が深まった。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが85%以上で達成】	A+B 95.6%	集計結果として、Aは56.8%、Bは38.8%、Cは1.0%、Dが1.0%、そしてわからないとの回答が2.4%であった。A+Bが95.6%で前回は+5.4%で達成度判断基準を上回った。但し、意見としては、昨年より学年便りがカラーになっていることはありがたいが、やはり写真は見づらく枚数も限られてしまうこと、また、学部や学年にもよるが、HPの更新がほとんどなくて残念というのが見られた。コロナ対策のために、教育ウィークも学年別に来校日と時間帯の制限を設けて実施したが、見たい授業を見る事ができず、コロナだから仕方ないという言葉で済まされるのは納得いかないという意見も見られた。数値的には高い項目ではあるが、行事の様子ばかりでなく、子どもに合った教育が正しく行われているのかということが伝わる情宣をこれからも考えていく必要がある。
2	教科指導及び実践力の向上	① 「特別支援学校における教科指導充実事業」が実施されることを踏まえ、教職員全体で学校研究を推進することを旨とする。	全学部 研究研修課	【成果指標】 研究授業の指導案作成に係るプロセスに主体的に関わることで、教科の視点による授業の構想・実践が理解できた。	研究授業実施に向けた学部内の指導案検討や研究授業参観等を通して、教科の視点で授業を構想することや実践・評価の意義を理解することができた。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	A+B 88.6%	集計結果として、Aは32.1%、Bは56.5%、Cは7.6%、Dが3.8%であった。A+Bは88.6%で、前回の90.5%から少し下がったものの、達成度判断基準は上回ることができた。特別支援学校にも教科指導の充実が叫ばれている中、今年度は全校で算数・数学の研究に取り組み、すべての教員が教科の視点からの授業構想や実践ができるように検討や実践、振り返りを行ってきた。全体の達成度は下降したが、A評価が非常に増えたことに着目し、確かな研究のすそ野が広がっていることを評価したい。反面、D評価が2倍になっていることにも注目し、教諭の意識や意欲に取りこぼしがないように気を付けて全員で頑張っていきたい。
3	コロナとの共生を意識した安全安心な学校運営	① 児童生徒・職員ともに今一度「新しい生活様式」の定着に向け取り組むことで、コロナ禍にあっても安全安心な教育活動の実現を目指す。	全学部 保健安全課 指導課	【満足度指標】 学校の感染症対策は子どもの特性を踏まえて適切に行われており、子どもは予防に対する意識が身につけてきている。	学校の感染症予防に係る児童生徒への指導は、子どもの障害特性に応じて適切に行われており、子どもの予防に対する意識も見られるようになった。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	A+B 90.5%	集計結果として、Aは57.5%、Bは33.0%、Cは1.4%、Dが1.4%、そしてわからないとの回答が6.8%であった。A+Bが90.5%で前回と同程度で達成度判断基準を上回った。C、Dと回答された方の意見には「マスク着用を一律にしているが、マスクを正しく着用できるなら特別支援学校には通っていません。感染予防はもちろん大切ですが、鼻が出ていたり、噛んでビしゃビしゃになったマスクを着用することに意味があるのか疑問が残ります」というものがあった。3年間、感染の様子を追跡調査した立場としては、不織布マスクの着用が感染防止に大きく作用することは実感できる場所であるため、濡れたマスクの交換や、集まる人数が多い時の場面的マスク着用を励行し、着用できる児童生徒は本当に多くなっている。酸素供給を阻害するマスク着用の脳の発達や健康への悪影響を心配される向きもあるため、1日も早くマスク無しで生活できる日を望むばかりである。
		② 体力づくりの充実等を通して、転倒しない体力・体幹を身につけるとともに、教育環境を整えることで、転倒によるけがなどの予防に努める。	全学部 保健安全課	【成果指標】 体幹を鍛える指導や環境整備に努めた結果、同月比や同時間帯比の事故発生件数が減少している。	体力・体幹を鍛える指導や環境整備に努めた結果、同月比や同時間帯比の事故発生件数が減少している。 A: 前年度より20%減少した B: 前年度より10%減少した C: 前年度より5%減少した D: 前年度とほぼ変わらなかった	【Aで達成】	C 6.3% 未達成	前期評価時と同じように保健室入室件数の前年度比較(4月～1月)をしたところ、今年度は9～11月に入室件数が増えたこともあって、全体としては前年度比6.3%の減少にとどまり、前期の11.8%を大きく下回ることとなった。学部別では、小学部が48件、中学部が31件、高等部では18件となった。入室件数における外科的利用が占める割合については49.9%(R3は48.9%)で約半数を占めるが、今年度特徴的だったことは、自傷・他害・衝突・転落の割合がほぼ変わらなかった中で、転倒の数が著しく減少したことである(R4は63件、R3は3月まで統計で101件)。評価はCとなったが、バランスの悪さや多動・注意散漫・衝動性といった障害特性を踏まえ、毎日体力づくりの時間に行ってきたロコモ体操や、自立活動室の教材・道具を活用した体力づくりの効果が多少は見られたのではないかと考える。
		③ 保護者や来校者に対する教職員の丁寧な対応をさらに励行する。	全学部 事務職	【満足度指標】 保護者や来校者に対する教職員の応接態度が丁寧で気持ちの良いものであると感じる。	教職員の挨拶や電話対応、懇談での説明などの対応は、丁寧で気持ちの良いものである。 A: あてはまる B: ややあてはまる C: あまりあてはまらない D: あてはまらない	【A+Bが80%以上で達成】	A+B 94.9%	集計結果として、Aは74.1%、Bは20.7%、Cは0.7%、Dが2.0%、そしてわからないとの回答が2.4%であった。A+Bが94.9%で達成度判断基準を上回った。前回比としては、CやDが減りA回答が4.2%上昇した。但し、「挨拶はどの先生もしっかりされていて感心します。一部の先生だけだとは思いますが電話対応がいい加減で毎回とても残念です。」「担任の先生以外の先生から挨拶以外で話し掛けられることがほぼなく残念に思っています。」との意見もあった。前回と変わらず挨拶をしない(できない)教員がいるとの状態を真摯に受け止め、気持ちの良い対応が出来るようこれからも努力を続けていく。
4	業務改善(業務の効率化、平準化)	① 業務改善に向けて、今年度はICT支援員の手も借りながら、分掌業務のデジタル化をさらに推進し効率化を進め、特定の教員や時期に集中しがちな業務を分担して行うようにする。	全学部 各課 教育相談部 自立活動部 県特研事務局	【成果指標】 各学部、各課において、デジタル化を推進し、業務の効率をあげることができた。	業務がデジタル化したことで作業効率が良いと感じている教員の割合が増えた。 A: 80%以上 B: 65%以上 C: 45%以上 D: 45%未満	【Bで達成】	A 91.6%	集計結果として、Aは30.5%、Bは61.1%、Cが6.9%、Dが1.5%であった。A・Bと感じている教員が91.6%となり、前回より6.8%増えて、達成度判断基準を上回った。前回同様、アンケート回答のフォーム化や、会議資料をタブレット上配付に伴う省力化、効率化により生まれた時間や準備が、授業や会議の内容をより良いものにしていくという感想が聞かれた。ICT支援員にも大変活躍していただいております。様々な場面で業務のデジタル化が進んでいる。今後もクラウドやグループウェアをうまく活用することで確実に効果が見られる分野だと思っております。さらに推進していきたい。反面、オンラインが使用不可になった場合の予備システムの備えによる安定性の向上や、個々のタブレットのメンテナンスに取られる時間などの課題にも取り組んでいく必要がある。